



AQU 先端テクノロジー総研 《ニュースリリース》 2019/11/6

- BCI市場10%超の市場成長！
- コードレスEEGは医療ヘルスケア需要中心に15%成長へ！
- 簡易型脳波計、認知症予防診断(アプリ)に需要！
- 脳波ビジネス調査報告書まとまる！ AQU先端テクノロジー総研

<https://www.aqu.com/brain-ai-mirai/>

<https://www.aqu.com/aqu-news/2019-11-6.pdf>

ニュースリリース

<https://www.aqu.com/>



世界におけるブレインコンピュータインタフェース(BCI)市場は10%超の市場成長続く。市場は医療ヘルスケアやエンタテインメント需要などが市場をけん引。脳波計ヘッドセットにおいては簡易型コードレスタイプの市場成長が注目される、とくに簡易脳波計は、認知症予防診断(アプリ)に需要あり、と民間調査会社のAQU先端テクノロジー総研(代表、子安克昌)が調査報告書をまとめた。

世界におけるブレインコンピュータインタフェース(BCI)市場は10%超の市場成長続く。市場は医療ヘルスケアやエンタテインメント需要などが市場をけん引。脳波計ヘッドセットにおいては簡易型コードレスタイプの市場成長が注目される、とくに簡易脳波計は、認知症予防診断(アプリ)に需要あり、と民間調査会社のAQU先端テクノロジー総研(代表、子安克昌)が調査報告書『最先端・脳波ビジネス、BMI、BCIの開発動向と

市場予測 - 簡易脳波計ヘッドセット、ブレインテック、人間拡張技術が創る未来市場 -』をまとめた。

調査によると、

ブレインコンピュータインタフェース(BCI)の世界市場は、10%超の高成長が続き、2025年には、2,500百万ドル規模に達するとしている。また非侵襲型のウェイトが高まる中で、脳波計ヘッドセットは年率13~17%の市場成長が予測。最近では従来の医療機器と比べ充分活用できる計測精度を有するパッチ式やシート式などの脳波センサ(簡易型脳波計)なども登場してきている。今後、医療ヘルスケア、睡眠、教育、マーケティングなど幅広い用途に浸透してゆくと予測している。関連のビジネスモデルも進化しており、高齢化社会にあって、症状ごとの脳波パターンから、たとえば認知症予知診断などで専門医と連携したAI解析クラウドサービスなども将来的に広がってゆくと予測している。

同社は、意識調査を実施している。

会社員、公務員など2,100人を対象とした意識調査では、簡易型脳波センサー(脳波計)、ブレインマシンインタフェース(ブレインコンピュータインタフェース)について、その利用用途として、どのような分野に関心があるかを質問したところ、「認知症」(68.1%)が最も多く、続いて、「うつ病、統合失調症」(58.9%)、「ストレスチェック」(57.3%)、「睡眠判定」(54.7%)、「発達障害」(53.0%)、「集中力養成」(51.4%)、「効果的学習」(50.2%)となった。これらはみな、50%を超えている点が注目される。とくに、「認知症」は3人に2人が関心を持っている。簡易型脳波計の「認知症予防診断(アプリ)」について、将来的に、「使ってみたい」と回答した人は、全体では、46.3%であったが、50歳代では、49.5%、60歳以上では、59.6%と、高齢者になるにつれて、欲求度が高かった。

特許情報に基づき、脳波に関する特許登録(2000年以降)を調べたところ、パナソニック、ソニー、フィリップス、富士ゼロックス、NTTなどの大手企業が多いことが分かった。また脳波計(2000年以降)を調べたところ、パナソニックがダントツ。続いて、産業技術総合研究所、島津製作所、情報通信研究機構などであった。最近の顕著な動きとしては、脳波計測による意思伝達装置「ニューロコミュニケーター」を研究している産業技術総合研究所が、ここ2、3年で5件増えており、順位を上げている。またマツダなども順位を上げている。

米国のIT大手GAFA(Google、Amazon、Facebook、Apple)にMicrosoftを加えたビッグ5の場合では、AI、AR/VR、自動車などの特許出願登録が多いが、脳波関連も少なくない。たとえばMicrosoftは考えただけでアプリケーションを動かす技術「Brain Computer Interface」の特許を取得。EEGの消費者向け製品の可能性を探っている。Facebookも脳波のパターンをAIで予測、コミュニケーションに生かそうとしている。ハード的には、VR、ARデバイスなどとの複合化も考えられており、商品企画面でも可能性が広がっている。

AQU先端テクノロジー総研では、「高齢化が進む中で、病院診療のあり方も変わろうとしており、在宅医療重視の動きが見られる。その意味でも、簡易型の脳波計は、体温

計、体重計、血圧計などのように、将来的に家庭に大きく普及してゆく可能性がある。とくに、高齢者の場合、認知症予知診断に関心を示している点が注目される。いつでもどこでも脳波を解析できることで、簡易型脳波計の果たす社会的役割が増してゆくと考えられる。|としている。

## ■調査テーマ

## 『最先端・脳波ビジネス、BMI、BCIの開発動向と市場予測』

『簡易脳波計ヘッドセット、ブレインテック、人間拡張技術が創る未来市場』

<https://www.aqu.com/brain-ai-mirai/>

ISBN 978-4-904660-42-3

■調査スケジュール 2019年8月1日～2019年11月5日

## ■調査の実施

AQU 先端テクノロジー総研

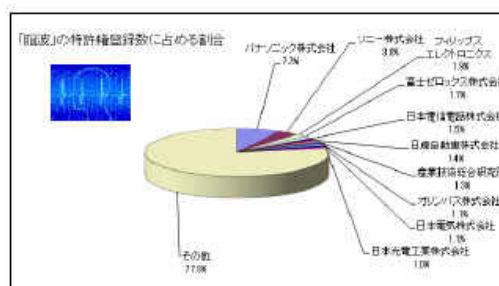
## 脳波ビジネス、ブレインテック市場調査プロジェクト

### 【アンケート調査結果の注目点】

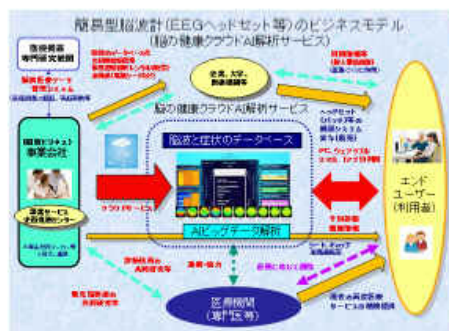
## 簡易脳波計ヘッドセットのビジネスビジョン



脳波特許ランキング(一例)



脳波AI解析のクラウドサービス



## 高齢化社会へ挑む、脳波ビジネスの可能性



※ 調査の一部

**※お問い合わせ連絡先**

株式会社 AQU 先端テクノロジー総研  
<http://www.aqu.com/>

〒260-0027 千葉市中央区新田町 36-15  
千葉テックビル 6F  
TEL 043-204-1258  
FAX 043-204-1316  
子安、那須  
[info@aqu.com](mailto:info@aqu.com)